語るＢｅ・語り部

【山形県支部ＰＥインタビュー】

はじめに

山形県支部ではこれまで技術士の取組んできた技術についての発信の場をつくること、そのノウハウおよび技術士の資質などを読んで学べる資料を残すことなどを目的として、PE インタビューという事業を行うこととしました。試行という形で実施しましたので概要を報告します。

日時：令和４年１月 21 日(金) 14 時～16 時
場　所：山形県支部事務局会議室
（株式会社田村測量設計事務所内）
対象者：共和コンクリート工業　吉田郁夫
双葉建設コンサルタント　會田秀一
STAFF：広報委員会　秋山純一
山形県　後藤美保（臨時）
オブザーバー事務局：西尾斉、小山田孝一

ともに山形県 OB である両者へのインタビュー内容は、時代背景を交えた生い立ちから学生時代、山形県技術職員としての仕事のこと、趣味にまで多岐にわたりました。貴重な経験談と技術士としてのポリシー、意見を聞くことができました。

写真 1．インタビューの様子

インタビュー

（秋山氏）

私は、県支部の広報委員会で副委員長をしている秋山です。今回の技術士インタビューを担当することになりました。

昨年 11 月にダイヤコンサルタントを退職して、今のところは離職中ですが、自宅を事務所に登録して、『技術士事務所秋』ということで活動を続けています。技術士資格は失くせないし、活動もやめたくないので、続けていくことにしています。

私事ですけれども、退職後は鶴岡市内に家族経営でカフェを開くことにしておりまして、４月オープンの予定で、今のところ準備中です。２月の初めぐらいに、やっとリフォームが完成するような状況で進んでいます。個人のことで恐縮ですが、そんな状況です。今日はよろしくお願いします。

同じ広報委員会でインタビュー担当を、この度は後藤さんからやっていただくことになりまして、今日来ていただいております。後藤さん、自己紹介を兼ねて、お願いします。

（後藤）

現在は、最上総合支庁の河川砂防課で災害復旧工事の担当をしております。地すべりが、今、大蔵村で４カ所起こっておりまして、そちらの工事現場の担当をさせていただいております。本日は大変恐縮なのですけれども、何かお役に立てたらと思い参りました。よろしくお願いいたします。

（秋山氏）

よろしくお願いします。

それでは、早速インタビューに移ろうと思います。質問事項については、大まかなものは予めお渡ししているので、資料も準備していただきまして本当にありがとうございました。

進め方としましては、同じ質問をお二方の方からそれぞれ答えていただいて、次の質問へという形で進めていきたいと思います。その中で、吉田さんと會田さんの双方の中でも質問があったりとか、御意見があったりすれば、埋めていただくのがよろしいかと思います。時間が足りないとは思いますけれども、２時間、１６時までということで進めさせていただければ大変ありがたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、最初に、こちらの方で用意した質問としまして、少年時代から学生時代までの概略というか、主

だったこと、もしくは印象に残ったことをお聞かせください。
吉田さんの方が学卒は２年早いですね。會田さんは、実は私と同じ５４年卒です。
では、先輩の方から先にお願いいたします。
（吉田氏）
今までの経緯については、書き留めたものを参考に、ということになると思います。
自己紹介としては、うちは農家で、次男坊、自分では思わないのですが『小さい頃はきかなかった』と言われます。
小学校が近くて、低学年の頃は体力がそんなになかったのかな、という気がします。どっちかというと、本を読む方が好きだった気がしますが、でも動くことも結構好きで、地区の卓球大会に出たりしていました。小学校・中学校とも地元で、ほんとの近くで暮らしてきました。
印象に残っているのは、中学校が２年生の時に統合になったことです。天童市は、田麦野を含めて八中までありましたが、倉津川の北側と山口地区を含めて統合した二中をつくることになり、たまたま元の中学で生徒会長をしていて、山口地区が中心ということで、そのまま生徒会長になりました。
そのとき、町場と田舎は違うなと、女の子がすごくかわいく見えました（笑）。やっぱり田舎だったので、『いいなあ』と思いました。クラスは混合になりましたけれども、そういう意味で変化が出てきたのかな、と。そのときは美術クラブに入っていたけれど、あまりクラブ活動はしていなくて、生徒会活動が忙しかった。
高校は東高で、同じ中学から５、６人一緒に行っていましたので、仲間に加えてもらいました。生徒会活動をしてきて、どうも団体活動をあまりしたくなくなったので、ノンポリになりました（笑）。そういった意味では、良かったのか悪かったのか、結果論ですけれども、やっぱり入っておけばよかったなという気持ちもあります。基本的には、汽車通で３年間通いました。結構一人でいることが多かったので、夏はプールに一人で行って泳いで、図書館で本を読んだりして、そんな生活をしていました。
大学は、将来の仕事のイメージが明確だと良いですけれど、なかなか田舎だと良く分からなかったので、入りやすいというのもあって工学部にしました。実学の方が良いかなというのはあって、あと美術系・建築系はデザインが必要で、ちょっと自分には向いていないなと。美術はしたことがあったので、好きではあったけれど、ちょっと自分にデザイン的な部分はないなと思って、土木で大学に上がりました。
大学では、最初は下宿でした。その頃は路面電車が通っていて、ちょうど新幹線が延伸してきている頃で、建設ラッシュでしたね。色んなビルが建ったりして、そんな時でした。
実は、成績的にはもうちょっとで医学部行けるかなと思ってもいたので、ちょうどその頃、山形大学に新しく医学部ができて、試験があったんですね。１年間隠れ浪人をしようと思ったけれど、意志薄弱で（笑）、続けられなくて諦めました。
あとは、このままで４年間ずっといるのはつらいので、環境を変えると色々変わるのかな、と思って、１年の最後に友達の伝手で寮に入りました。
やっぱり、寮っておもしろいですね。勉強はしなくなりますけれども（笑）。２年目の後半ぐらいで、寮の委員をやらなければならなくて、とたんに大学には行かなくなってしまいました。大学は、実習は必須科目なので取っていまして、真面目に行ったストックがあったのと、３年に上がって追試を受けて、青葉山に行きました。土木といっても広いので、その頃の流行りの汚染制御（衛生）工学が面白いと思って、専門として１年やって卒業しました。
特に印象に残ったのは寮生活で、寮の人は東北だけでなく大阪など色々なところから来ていたので、その人たちと夜遅くまで色々話をしたり、マージャンをしたり、楽しい生活をしていました。なんとか普通の学生だったのかな、という気がしています。以上です。

写真２．左、會田氏、右、吉田氏

（秋山氏）
ありがとうございました。
生徒会長ってすごいですね。
（吉田氏）
全然すごくない。すごくはないけど、たまたまなって。
ただ、ああいうのって、あまり良くないですよね。挨拶をさせられたり、色々させられたり、子供にとって、向き不向きはあるにせよ、プレッシャー的な部分はあったと思いますね。そういう気持ちがあったのかもしれないです。
（秋山氏）
でも、そういうのって、のちのち効いてきますよね。
では、會田さんの方からお願いします。
（會田氏）
私は上山市に生まれて、上山で育って、今も上山の実家から通勤しています。
小・中学校時代は、好きなものが本を読んだり、工作、模型作りをしたり、絵を描いたりということで、あまり外を出歩くことはなくて、今で言うインドアの子供でした。当時の男の子が良くやったプラモデル作りとか、秋になると小学校で模型飛行機大会があって、そういう物を作るのが小さい頃から好きでした。
夏休みの宿題ってみんな大変だと思うんですけれど、『自由研究で一つやってこい』なんて言うと、自分でテーマを決めて実験して、その頃から物事をまとめて書き表すみたいなところは抵抗がなくて好きだった記憶があります。
当時、上山は本当に田舎で、小学校の頃に、絵を習いに週に１回山形市に来ていた頃は、大沼デパートとか七日町がすごく賑やかで、『山形市ってすごく大都会だな』と思っていました。
高校に上がる時になって、上山からは地元に行ったり、山形市内に進学したりするのですが、成績の関係で山形東校を受けて、合格しました。さっき、吉田さんも言っていましたが、当時の『汽車通』でした。クラブ活動は、中学もそうですけれども高校も生物部に入って、プランクトンを取りに行って観察したり、棲んでいる沼の空気の量を測定したりするのですけども、ほとんどは理科実験室、生物室の大きいテーブルで、みんなで卓球したりしていました。真面目に勉強や研究するというよりは、放課後、同級生とかみんなで遊んでいた方が多かったです。
高校時代も模型作りが好きで、科学雑誌を見て、ブザーとか光線銃とか半導体を買ってきて、くっつけていました。高校の文化祭が秋にあるのですけれど、本当はプランクトンの研究発表をしなければならないんですけど、その傍らにゲームコーナーを作って遊んでいた記憶があります。高校はそういうことで、結構楽しかったです。
『高校から次はどうするか』となったときに、漠然と仕事という感覚がなかったので、今まで好きだった理科、特に物理関係の大学を目指そうと思っていました。大学を選ぶときに、これはのちのちにも響いてくるのですが、私が長男なので、父親から『家に戻って来い。あまり遠くには行かせられないよ。』と言われました。せいぜい、東北とか隣県の大学ならという条件付きで、当時の高校の成績で受けられる隣県の大学ということで、東北大に入学することにしました。
吉田さんと同じで、最初は下宿にいたんですけれど、門限もあるし、夕飯時にはちゃんと帰らなければいけないので、だんだんそれが不自由になって、１年生の途中でアパート暮らしを始めました。門限も何もない一人暮らしが楽しくて、友達の家を渡り歩いて、行き来して、学生生活を楽しんできました。そんな大学生活でした。
（秋山氏）
ありがとうございました。
お二人とも、大学ではサークルに入っていないですか？
（會田氏）
私は、マンドリンクラブに入っていました。その時ギターを持っていて、同じ高校から行った友達もギターが好きで、なぜかマンドリンクラブに入っていたんですよね。
マンドリンクラブといっても、マンドリンとかギターとかベースとか、色々パートがあるので、マンドリンクラブに入って３年生くらいまでギターを弾いていました。
（秋山氏）
そんなにのめり込んだ感じではないですか？
（會田氏）
楽器というより、さっき言ったように、友達との付き合いが楽しくて。
当時のサークルの友達同士で行き来して、遊んで、卒業後もどちらかというとクラスの友達よりはサー

クルの友達との付き合いの方が深いですね。
（吉田氏）
サークルっていうと、大会に出て頑張るとか、仲良くなるのが主の２つの付き合いがありましたよね。
（秋山氏）
吉田さんは、『２年の後期はほとんど大学に行かなかった』と言っていたじゃないですか。私もバンドにちょっと凝って、２年の後半はほとんど行っていなくて、ほとんど単位を取れなかった経験があります（笑）。
（一同）（笑）
（吉田氏）
そうだよね。あの頃は、緩いというか、必須（履修科目）さえとっていると、あとで追試を受ければ何とかなるような時代でしたね。教養学部が２年まであるけど、意外と緩かったから、色々あって夜遅くまで起きていて、朝になると（今日の授業）もういいや、と（笑）。
（秋山氏）
そうですよね。
（會田氏）
今は、うちの子供たちは、ネットで休講が分かるのですけど、我々の頃はキャンパスまで行かないと分からないんですよ。『何とか先生は今日休講だ』ってなると、せっかく朝早く起きて行っても授業がなくて。
（吉田氏）
あんまりまともに出欠取っていないものね。
（會田氏）
そうですよね。先生によっては全然取らない先生もいて。
（吉田氏）
代返とかもあった。
（秋山氏）
あんまり出欠は取ってなかったような気がしますね。紙切れを配って、名前書いて終わり、そういう先生もいましたね。
（會田氏）
いましたね。
（秋山氏）
ありがとうございました。
後藤さん、なにかありますか？
（後藤）
学生時代のことですか？先ほど、今と休講のシステムが違うという話がありましたが、昔と今を比べて違うなあと特に感じるところはありますか？
（吉田氏）
当時は、自主性というものを重んじたかもしれませんね。学生を、ひとりの大人だと。今は１８歳から成人のようですけれども。
私が入った寮は自治寮と言って、寮母さんの給料は大学からも出ているけれど、基本的には自分たちで運営するのですよ。だから、寮の中で全部決裁する。寮の当番と言って電話当番もいるし、炊幹（すいかん）と言ってご飯の関係、それから総務と言って対外的な折衝とかもある。寮によってはすごく過激なところもあって、その当時、全学連の関係ですごく厳しいところもあった。うちは緩くて政治的なところは全然なかったけれど、やはり自分たちの寮を自分たちでどうするか、寮のみんなで話をして、そういう意味では一つの独立国みたいなところがあって、すごいですよ。今では考えられないような、一つの部屋はたこ部屋で、そこでみんな寝ているのですよね。勉強なんかできるわけがない（笑）。
（秋山氏）
たまたま同じ大学だけれど、片や自由なアパート暮らし、片や組織だった寮の元締め、全然違うところがおもしろいですね。
では、次に移ります。最終学歴まで進んだ後に、仕事も見据えた上で専門を選んだと思いますが、それらの理由について、いただいた資料のほかに付け加えたいことがあれば、付け加える程度のことでお話しいただければと思います。
（吉田氏）
土木を選んだら、ダムを造ったり、橋を造ったり、そちらの方に行くのが普通かと思います。同級生の仲間を見ていると、そういうところに進んだ人が圧倒的に多いです。
そういう意味では、同じ土木の中では異質なものを選んだ。なぜ衛生工学を選んだのかというと、土木の範囲はすごく広くて、専門の衛生工学とは言うものの、実際は材力（材料力学）とか土質、コンクリートなど一般の基本的なところは同じなのですけれど、その中でも土木の、民と公と考えたときに、公の方に魅力を感じたのですね。
おそらく、土木の場合は、そういう意味では民と公の二つが同居しているような技術体系なのかなという気もします。そのときは、公を選びたいというよ

うな気分になった。それは、寮生活をしていて、色々なところでより公を重んじるような部分で議論をしていて、そういう影響もあったかもしれませんね。もっと純粋にものをつくりたいとか、土木的な発想であればもっと別の進路を選んだかもしれませんけれども、その時の時代の背景とか、色々話した友達とかがあって、専門をどうするとなったときに、そういうのに倣わされたというか。変な言い方ですけれど。

例えば、そのまま残って、専門の方の大学院に、あの頃でも2，３割は行っていたので、行けば、衛生工学であればそちらの方面のコンサル系に進む人が多かったですね。専門に行かないと、公務員になっている人が多かったです。あと、コンクリートや材力になると、やはりどちらかというと大手のゼネコンの方に行くような感じがします。

最初のとっかかりの部分、『自分がどうだ』というところで、専門、選ぶ講座も決まってくる形だったと思います。

（秋山氏）

ありがとうございました。

最近、東北大に就職のプレゼンに行くと、やっぱり公務員とか JR とかが人気なんですよね。最近は、コンサルにはあまり来ない。みんな、プレゼンをした後に個別に質問に来るのですけど、建設系のコンサルタントにはほとんど来ないですよ。

（吉田氏）

志向が変わってきているかもしれませんね。

（秋山氏）

変わってきているかも。

（吉田氏）

東北大の同窓会誌を見ると、土木に入った人でも色々なところに行っていますね。例えば、JAL など航空の関係とか、ほとんど専門と実際選んだ就職先がリンクしていないような感じがしました。

（秋山氏）

ありがとうございます。では、會田さん、お願いします。

（會田氏）

今日紹介しようと、卒業論文の資料を持ってきました。（資料を見て）当時はワープロやパソコンがなくて、全部手で書いたんですね。図表なんかも当然手書きで、今はパソコンや CAD でできますけれども、思い起こすとよく昔はできたなと。雲形定規で書いて、文字や数字もテンプレートで全部書いて、よくやったなと思っています。

写真３．會田氏

（秋山氏）

そうですね。

（會田氏）

何をやったかというと、物に光を当てて反射した光を見て、工学的な性質を量るということで、実験した後にプログラミングしてその答えを出すというのがテーマだったんです。先輩がやったのを引き継いだ形でやっていました。（資料を見て）なつかしいですね。こういうの…。

（秋山氏）

ああ、プログラミングフロー…。

（會田氏）

フローを描いて、プログラミングして、これはフォートランです。

やっぱり科学技術だとフォートランですね、端数処理の関係があるので。事務計算だとコボルが主体ですけれど、科学技術だとフォートランを使っていて、当時、大学の大型計算機センターに行って、パタパタと紙のカードを読み込ませるのですけれど、プログラミングを間違えると無限ループになって、真っ白な紙が何十枚と出てきて、途中で強制的に、例えば百枚になったら打ち切るとかにしてやらないと何百枚も出てくるので、そういう失敗を繰り返した記憶はあります。

その頃、プログラミングとか計算をたまたま研究室でやったのが、のちのち、社会人になったり仕事をしたりする中でも、コンピューターの世界に入ったというきっかけで。今思うとすごく原始的な中身だけれども、今だったらパソコンレベルで十分できることが大型計算機で時間をかけてやったことで、科

学の進歩というのがすさまじく進んでいるなと感じます。
（秋山氏）
そうですね。高校生の生物部の時の、机の卓球台のピンポンの反射角がそういう形で出てきているという（笑）。
（一同）（笑）
（會田氏）
そこまで計算したわけではないですけれど（笑）。
（秋山氏）
フォートランは私も専攻したけど、３日連続で初めの頃休んじゃって、さぼったって言った方がいいか、そうしたらもうついていけなくて、フォートラン投げたんですよ。
（一同）（笑）
（秋山氏）
フォートランは分かるけどなって（笑）。みんなフォートランだったよなって、懐かしく聞きました。ありがとうございました。
（吉田氏）
卒論は、活性汚泥のバルキングという衛生工学分野で、一つのバッチ（水槽）の中に汚泥、いわゆる汚物を入れて、それがどういう風に浄化されていくか、どのような投入割合が良いか研究するというものなんですけれども、ちょうど今の時期に一生懸命実験しているんですよ。研究室で、バッチ試験になると２４時間１時間毎にホールピペットで試料採取して、それで色々な数値を計測しました。今の時期寒くて、寒くて、非常につらい思いをした記憶がありますね。食堂に行こうとしても、青葉山だから吹雪で前が見えなくなるんです。今思い出すと、苦しかった卒論の時期ですね。
（秋山氏）
卒論はだいたい苦しいじゃないですかね。ありがとうございます。
じゃあ、就職を決定づけたものは何かという質問ですけど、吉田さんの場合は公のものづくりがしたいということで、県職員に進まれたということですけれども、會田さんの場合は決定的なものは何かございましたでしょうか。
（會田氏）
私の場合は、第一志望の物理の教師の採用がなかったので、どうしようかなということと、そうは言っても社会人として仕事はしたいなという気持ちがありました。その時に、母親が知っている人に相談に行って、『県職員だったら色々な職種があるので受けてみたら』ということで受けました。
是が非でも県職員、公務員になりたいという気持ちはなかったですけれど、一つ可能性があるなら受けてみようということで、受けました。合格したら、親は二人ともすごく喜んで、『当然公務員になる』ということなので、今更引けないわけですね。試験を受けて合格したということであって、当時は別になりたくないけど、親がこんなに喜んでくれるなら期待どおり公務員にならなければならないと思ってきたというのが、公務員、県職員になったきっかけです。
（秋山氏）
ありがとうございました。
吉田さん、何か補足ありますか。
（吉田氏）
その時って、そんなにわからなかったですね。県の仕事ってどんなものか、とか、あるいはコンサルも含めて仕事のイメージって掴めなかったですね。
ここにも書いたんだけれど、（就職説明会で）『私、今、会社のために一生懸命がんばっています』とかＰＲに来て、それを聞いていて、なんか嫌だなあと思ったのを覚えているんですよ、説明の仕方が。会社のために尽くす、とかいう話を聞いたときに、『んっ、ちょっと違うんじゃないの』と思いました。
おそらく、人によるだろうけれど、そういうＰＲだけではダメなんですね。『こういう風になるよ』っていう将来のイメージがないと分からないですよ。
おそらく、必要なのは将来のキャリアイメージというか、どういう風な姿になるかというのをイメージするようなきっかけがあると、『じゃあそれに進もう』という気がしますが、なかなかそういう機会ってないと思います。
あとはもう、教授の紹介や先輩の就職先の中で続いていくくらいしか、あまり選択肢はなかった気がします。
（會田氏）
当時、工学部だったら、もう引く手あまたで行けたんではないですか。
（吉田氏）
建設会社だったら、何社かは紹介してもらえるような状況でした。そういうルートで行けば、そっちの方だったでしょうが、何か今ひとつ。その時の気分

ですけれども。
（秋山氏）
公務員っていうのは最も公平な職なので、コネとかツテとかはない状態で進む道なので、それぞれの志があってなのかと、ある程度想像したりしますけれども、でもまあ、なんとなくなんですね（笑）。
（吉田氏）
自分の例では、国家公務員試験は落ちた、次は県だ、県は受かった、とかそういう感じです。県だったらやっぱり自分が生まれ育った山形に入りたかった。
（會田氏）
私の場合は、県の職員が何をしているか分からなくて。うちの父親は市の職員だったので、戸籍係とか、そういう窓口とかのイメージはできるんですけども、県の、ましてや土木職員がどんな仕事をしているかなんて、全然分からなかったですね。
（吉田氏）
入ってからしか分からない。入ってからでも良く分からなかったけれど（笑）。
（會田氏）
何も分からないから、こういうものかなって受け止めて色々教えてもらったけれど、かえって専門で、例えば『橋梁専門でした』とか『道路の構造専門でした』とかいう人は、実際現場に出たら全然違うことをしなければならないわけですね。現場に行ったり、苦情処理をしたりとか、それこそ。半年くらい経って、大学の土木を出た人のところに行ったら、『全然考え方が違って、大変だ、大変だ』って言われたので、かえって王道を来た人から見ると、公務員の場合はギャップが大きいんじゃないですかね。
（吉田氏）
例えば、入ったばかりの時だと、大学出ているから分かるだろうと言われるけれど、全然分からない（笑）。
（會田氏）
全然分からない（笑）。
（吉田氏）
そのギャップがすごい。高校なり、高専なりできちんと土木をやっている方が、遥かに土木の力はある。大学ではほとんど基本的なところしか習っていないので分からないんですよ。だから、『そういうことを知っているだろう』という前提で来られると困りますよね（笑）。そういうギャップはありましたよね。
（秋山氏）
資料にもありましたけれども、だからこそ一生懸命勉強するような感じになるんですね。『分かっているだろう』と聞かれると。
（吉田氏）
積算かな。まずね。
（會田氏）
なかったですよね。積算なんてね（笑）。
（秋山氏）
積算はそうですね。大学ではないですね。
お二人の話を聞いていると、私の亡くなった父のこともちょっと思い出します。御立場として、吉田さんは次男、會田さんは長男で、お立場が全く違うわけですよね。そういった家庭の長男・次男・三男という縛りがお二人とも違ったわけですけれども、それは就職するにあたりどのぐらい影響を受けていますか。吉田さんは、どこに行ってもいいよって言われて育ったんですよね。
（吉田氏）
繰り返しになるけれど、同じ仕事するなら山形県がいいなと思いました。そういう意味での縛りではなくて、自分の愛着でしょうけれども。縛りはなかったですね。
もっと言うと、冒険心があったら、その当時はどんどん世界中に行って仕事をするとか、そういう人もいっぱいいるわけです。そういう仕事をしたいというのが普通の土木屋なのかな、と頭の中のイメージとしては思いますが、これは違うなと（笑）。
（秋山氏）
なるほど。
（會田氏）
私は、小さい頃から長男で後継ぎだと。まあ、家に戻ってくるということが大前提で刷り込まれてきたので、疑いもようもなく、反抗できずに、ずっと家ですね。
（秋山氏）
そのプレッシャーで、逆にどこかに行きたいとかというのは起こらなかったですか。
（會田氏）
いやあ、それはないですね。
やっぱり、ずっと生まれ育つと、それなりに住んでいるところが良いし。県職員の場合だと転勤があって、庄内の方に行けば単身なり家族で行くことがあって、私の場合は単身で１回、家族で１回行きまし

たけれども、酒田や鶴岡はそれなりに地区、地区で良いところがあるんだけれども、やっぱり住み慣れたところが良いのかなと思って。
（秋山氏）
ありがとうございます。うちの父は長男だったんですけれども、外に出られるチャンスがあって出たかったらしいです。でも、『長男だからうちにいろ』と言われて結局行けなかったというのを、私が学生になった頃でも言うんですよ。よっぽど悔しい思いをしたのだろうなと思って。
（會田氏）
私、子供が男女一人ずついるんですけど、長男には帰って来いとは全然言わないです。自分が言われてきた反動で、全然言ったことはないので、子供は家を出ていますけども。
（秋山氏）
逆に、そういうところで良い方向に向いているかもしれないですね（笑）
（吉田氏）
私は、二人男の子で、二人とも東京にいるけど、一切そういうことは言わないですね。自分がそうだったし、そういうものは言うべきでないと。
そういえば、たまたま２番目が山形の市役所に入って、『このまま居てくれたらいいな』とすごく期待をしていたら、やっぱりまた出ていきましたけどね（笑）。
（秋山氏）
そうなんですか（笑）。
（吉田氏）
でも、小さい頃は、やっぱり言ってないですね。
（秋山氏）
どちらの立場でも、良い方向に向いているような感じがしますけれどもね。
ありがとうございました。すみません、何か変な質問をしてしまって（笑）。
（吉田氏・會田氏）
いやいや。
（秋山氏）
次の質問ですけど、就職してから現在に至るまでの経歴を事前に御質問しましたけれど、これは公務員、県職員の方には相当重かったかなと思いまして。我々、業者にいるとそんなにいっぱい会社を替わる人はいないので、仕事もそんなにあっちこっち動かないので、概略的にポンポンと書けるかなと思って、その時は全くこういうことを想像していなくて。やっぱり県の職員の方って、ほとんど二年とかでポンポンあっちこっちに動くし、しかも、業者と違って全く違うところにも行ったりするので、メモでいいよとは言ったものの、大変なことを言ってしまったなと思って、どうもすいませんでした。
おかげさまで、お二人とも丁寧に経歴をまとめていただきまして、拝見させていただきました。いや、やっぱり大変ですごいことやっているな、というのが印象です。これを一つ一つお話をいただくと、とめどもなく時間が足りないので、こちらの方は資料で拝見させていただくことにします。
特に印象に残っている仕事をお聞きしたいですけれど、その前に、お二人が経歴の中で景観の研修でヨーロッパに行っていますよね。これはたまたまお二人一致するなと思いまして、パリと南フランスはお二人とも行っていますよね？
（會田氏）
私は、パリは行かなかったです。
（秋山氏）
南フランスですか？
（會田氏）
そうですね、南フランスから。そこは吉田さんと共通ですね。スペインに行って、イタリアにも行きました。
（吉田氏）
イタリアって２回行ったんじゃなかったですか。私、１回、１７年に行っているけれど。
（會田氏）
私は１回行きましたけれど。
（吉田氏）
そこ一緒ですね。
（秋山氏）
吉田さんは、スペインもイタリアも行っていますね。
（會田氏）
大体、全出席。
（吉田氏）
４回だとすれば、全部行っています。
（會田氏）
皆出席（笑）。
（吉田氏）
我ながら（笑）。
（秋山氏）
會田さんが、南フランスとスペインですかね。

（會田氏）
書かなかったですけど、イタリアも行きましたね。
（吉田氏）
間が空いたんですよね。同時多発テロで中断しました。行こうとなっていて、やめたね。
（會田氏）
そうですね。
（秋山氏）
そして、この研修が公務じゃなくて自費で行っているんですよね。
（會田氏）
そうですね。
（秋山氏）
費用は全く自費ですか？
（吉田氏）
そうです。有給休暇をとって。ただ、堀先生の分は建設技術センターから…。
（會田氏）
建設技術センターから、堀先生の謝礼とか、団体で行くバス代とかは出してもらっていました。
（吉田氏）
基本的には自費です。そこは、ぜひ、書くとしたら強調してください（笑）。
（秋山氏）
県の方では旅費は出さないけれど、研修は良いことだから行ってきなさいよ、というような事業だったんですか。
（吉田氏・會田氏）
そうですね。
（吉田氏）
その時期（１０～１１月）はちょうど議会もなくて、一番研修に行きやすい時期だったんですね。だから、一週間取れたというか。個人的には、大体みんな係長クラスになっていたので、係員をおいて一週間出るのがなかなか厳しくて、段取りをして、色々気を使った記憶はあります。
（秋山氏）
それなりに大変だったんですね。行くにしてもね。
（吉田氏）
それは、みんな配慮したと思います。
（會田氏）
その頃、県を挙げて景観整備・景観形成をしなければいけないという気運が盛り上がっていたので、ある程度周囲の理解もあったし、景観の勉強なら仕方ないなという理解…諦めだか理解だかあれですけれども（笑）、本当に協力的でしたね。

（秋山氏）
そうかもしれないですね。この頃、景観とかランドスケープとか色々話題になった時期かもしれませんね。
（會田氏）
予算的にもピークの時期ですね。平成１０年頃の建設費がピークなので。中央病院を改築したり、米沢の伝国の杜、上杉神社の隣に博物館とホールを改築したり、あと…。
（吉田氏）
緑化フェアが平成１４年にあって、そのあたりをピークに公園整備をしていました。
（會田氏）
公園整備、ありましたね。緑化フェアは、寒河江と新庄が会場でしたね。
（吉田氏）
霞城セントラルにしても、中央病院にしても。
（會田氏）
駅東に公園を作ったり、駐車場を作ったり。あと、新庄への新幹線延伸もその頃ですね。
（吉田氏）
そうですね。平成１０年代。
（會田氏）
平成１１年に新幹線が来たんですね。
それで、私が書いたやつで、（ヨーロッパ研修の）報告集を出したとありますが、現物を持ってきました。３年分、毎年作ったものを一冊にまとめたものです。（報告集を見ながら）こんな風にまとめて、一冊にして出版しました。多分、西尾さんも載っている（笑）。
（秋山氏）
自費出版ですか。
（會田氏）
違います。これは、当時の管理課の景観担当のところで中身はカラーコピーして、外だけ外注で何万円かで印刷会社に出しました。
今思うと、行っただけではなくて、記録集を作ってホームページにも載せてあるんですけれども、そういったＰＲの取組というのが良かったなと思います。

写真４．會田氏

（秋山氏）
そうですね。
（吉田氏）
キャッチフレーズがありましたね。キャッチフレーズを作りましたよね。
（會田氏）
そうですね。これ。『２０世紀をリードしたヨーロッパに学び、２１世紀をリードする山形を創る』という、すごく大層な…（笑）。
（秋山氏）（笑）
（吉田氏）
最初にパリに行った時にすごく良くて、続けてやろうという気運になったんです。
西尾さんは行きましたか。
（西尾氏）
私は、パリ、南フランス、イタリアですね。
（秋山氏）
結構、皆さん行っていらっしゃるんですね。
（會田氏）
毎回、２０人くらいずつ行っています。
（西尾氏）
前の支部長の三森さんも行っていますよね。
（會田氏）
三森さんは最初から行っていますね。
（西尾氏）
三森さんがパリのカフェで飲んだくれてる写真もありますね（笑）。
（會田氏）
勉強って辛いと覚えられないけれど、昼からワインを飲んで、楽しいと勉強になるので。
（吉田氏）
有休で私費だから、ワインを飲んだりできる（笑）。
色々大変なこともあったけれど。
（會田氏）
色々ありましたね。帰りに荷物が空港で違うところに行って日本に届かなかったり、急に途中で帰らなければいけなくなった人がいたり、色んなアクシデントがあった（笑）。行方不明になって帰って来られなかったとか。自由時間で外に出て行ったら戻って来られなくて、みんなで捜索に行って。
（秋山氏）
こういった形で日本にはないものを見てくると、『具体的にこうだ』というものがなくても、色々な場面でこういったものが活かされて、アイディアに活かされてきて、成果が上がっているという感じになりますよね。
（會田氏）
電線地中化、無電柱化ってやっていますけれど、ヨーロッパではどんな田舎に行っても電柱がないんですよ。どうやって電気を通しているかというと、壁に電線を張って繋いでいるところもあるんですね。日本だとやっぱり、単価が高いので無電柱化ってなかなか進まないですけれども、やる気というか、電柱は作らないという前提で工夫して施工しているので、スタートの考え方の違いで、なんでもやる気になればやれるんだな、ということはありましたね。
（秋山氏）
当たり前と思っていますけれどもね。外国人が日本に来ると、電線があるのでビックリするって言いますもんね。
（會田氏）
海外から戻ってくると、かえって安心する（笑）、日本らしくて。電柱が立ち並んでいると、日本に来たなあという感じがして（笑）。
（秋山氏）
逆にね（笑）。
研修の話を先に伺いましたけれども、その他、特にこれは自分としては印象にある仕事だなというのが、特にピックアップできるようなものがあればお願いします。
（吉田氏）
平成４年から３年間、道路整備課にいました。企画担当の時に、今は道路特定財源制度がなくなったので第何次道路整備計画というものは作られなくなりましたが、その頃は第１１次道路整備５ヵ年計画というものを国と連動して作っていて、地域高規格と

いう考え方が出たのがその頃なんです。
全国をネットワークで繋いでいこうという中で、山形県としては、山形自動車道（高規格）だけではなくて、地域高規格を入れてラダー型のネットワークでいこうという発想の中で東北中央道をつくってきました。今年、村山本飯田ＩＣと東根北ＩＣが繋がると、ようやく３０年経って、一つの大きな区切りだなっていう気がしますね。そういう意味で、３０年前くらいの若い頃にイメージしたものが、今ようやく出来上がるというのは非常に感慨深いです。
（秋山氏）
年数がかかるんでしょうけれどね。
（吉田氏）
かかりますね。順々に区間、区間でやっていくので印象が無くなってしまうけれど、繋がって初めて既定の区間になる。そういう意味では、長いですね。
（秋山氏）
確かにそうですね。
では、會田さん、お願いします。
（會田氏）
私は、県職員生活の中では、河川や下水道もしましたが道路が多くて、中でも橋梁が長くて１０年くらいです。骨子表にも書きましたが、発注者・受注者という関係、例えば県がいてコンサルがいてという関係で、対等とはいっても実際には発注者が上で受注者の方は条件を満たすようにやるんですけれども、そうじゃなくて、対等なパートナーという関係で仕事を進めないと良いものができない、というのが実感としてあります。
私も、今は立場が逆になってコンサルにいますが、今、会社の人には、何でも鵜呑みにしないで、疑問があったり質問があったりしたら相手に言うべきだと、色々疑問視して、口喧嘩でもいいんですけれど、議論までしないと本当に良いものは造れないよと言っているんです。
県庁の橋梁係にいたときに、足掛け５年いたんですけど、橋梁係長でそういう経験をさせていただいて、コンサルさんとか橋梁メーカーとか、何回もやり取りをして学んできたので、そういうところはすごく貴重な体験だったと思います。
（秋山氏）
橋梁なんか、特に技術進歩が速いですけれども、コンサルタント業者さんとやり取りをしていて、特に面白い工法だなと思ったことってございますか。
（會田氏）
山形県は、橋梁は経済性重視で、あまり突拍子もないタイプのものは創ってこなかったんですよ。斜張橋ですとか、そういったものは造ってこなくて。雪国なので、上に物を造ると雪や氷が落ちてくるので。今思うと、良いタイプの橋がどんどん無くなって、普通の桁橋になっているんですよね。残念なことに。どっちかというと、コンサルさんにお願いしたのは、工事の施工途中でちゃんと物を造ることができるのか、この部材がちゃんと入るのか、というのは色々議論をしました。図面に描いても、現場に持っていくと入らないよとか、どうやって材料を持ち込むのとか、あるんですね。そこは、我々も現場を経験すると分かってくるし、コンサルさんも経験を積むと分かってくるので、現場で施工を確保できる方法になるように色々注意しましたね。
（秋山氏）
近年だと、CIM とか BIM の画面でちゃんと長さが合っているかとか、収まるかとかシュミュレーションできるんでしょうけれどもね。
（會田氏）
そうそう、今はできますけれどね。今は、３次元で取り合いも分かるんですけれども。
（秋山氏）
昔はなかなかできなかったんですね。
（會田氏）
昔はなかなかできなかった。
そこも、何回も言っていると、今度コンサルさんから提案があって、ここは１本ものでは入らないから分割してくっつけると施工はできるとか、やり取りができたので、そういうのは良かったと思いますね。
（秋山氏）
うん。そういうやり取りがあって、今初めて BIM とかでできるんでしょうね。
（會田氏）
そうでしょうね。その積み重ねで。
（秋山氏）
ありがとうございました。
それでは、本題と言ったらいいでしょうかね、ちょっと話題が変わりますけれども、技術士の資格取得についてもお尋ねしていて、漠然と『技術士の資格についてどのようにお考えでしょうか』ということをお聞きしているんですが、吉田さん、よろしくお願いします。

（吉田氏）
ここにも書きましたが、私の年代の前で技術士を持っている公務員は非常に少なかったと思います。最近、非常に増えていますけれども。
技術士を取るというのは、非常に難しいという面もあるのですが、必要ないというか、技術士資格を取ったからといって、それを名刺に入れるということはしていないし、取ったから評価を受けるわけでもないし。仕事は、直接的に一番大きいのは対業者とか対住民とかが強くて、正直なところ、あまりそれほど意識はなかったですね。
ただ、（技術士資格を持っていて）良いなと思っている先輩もいるし、やってみたいなと思っても、やってみるためには勉強も必要だし、そこまで踏み切れなくて受けもしなかったです。私の場合は、ここに書いたように、たまたま異動して、みんなで受けようということで、その雰囲気で入っちゃったということが一番大きな理由です。一旦（受験申込みを）出したからには誰しも受かりたいので、その期間は勉強しますよね。ちょうど、制度が変わって、前は土木だと一次試験は論文だけで良かったんじゃないかな・・・。
（秋山氏）
そうですね。平成１３年かな・・・。
（吉田氏）
出せば、大丈夫なような。
（西尾氏）
前は一次試験はいらなかった。７年経験あれば、いきなり二次試験を受けることができた。
（吉田氏）
私の時は、一次試験が必要だった。一次試験だと、大学受験するような感じと書いてありましたね。それで、どうしようもないから過去問を解いてやるしかなく、短期集中的に過去問を解きました（笑）。
たまたまそれは受かったので、二次に行きましょうと。そんなに計画的にしているわけではないのです。
ただ、二次試験の時は、なかなか有名な部長の元にいて、毎日レポート書くことをしょっちゅうしていたんですよ。何か言われて、それにどう回答するかということは、試験のＱ&Ａに近かったのでそういうことが訓練になったのか、まとめ方とか、それが幸いしたのだと思います。
ただ、もっと若い時から資格を取って積み上げていくというのは非常に大事だし、コンサルさんと話をしても、建設業者を監督するにしても、相手は資格を持っていて自分に資格がないというのはちょっと違いますね。武器を持っているのと持っていないのと同じようなもので。それは、できれば持った方が、その仕事を円滑にするには、より有利になるだろうと思います。同じ話をしていても、同じ資格を持っているなら、その部分については対等ですからね。
対等というか、『同じ土俵の中で戦う』というのは言葉が強いですけれども。色々検討し合うというのが、より良いものに結び付くと思いますので、是非資格は皆さんがんばっていただきたいなと思います。
（秋山氏）
そこのところを、実は聞きたかったんです。
発注者側と受注者側、同じ立場でやるときに、片方は技術士で、片方は技術士じゃないというのは、どういう風にお考えなのかなと。ズバリ、今答えてくれたので、良かったなと思います。
（吉田氏）
つけ加えて言うと、そういう取得については職場環境というのが大事で、みんなで受けようという雰囲気がないと、一人だけコソコソっとやるのはあまりよろしくない。業務の一環という形で時間を取ってもらった方が良いし、そういう中で、もし落ちても『気にしないでまたやろう』というような環境を与えてあげたい。
（吉田氏）
會田さんもお願いします。
（會田氏）
今、吉田さんが言われたように、公務員が技術士資格を持っても良いことはほとんどなくて、ましてや昔から試験を受けるのがすごく大変だと、手が痛くなるほど鉛筆を走らせて論文を書いたというようなことばかり聞いていたので、受けなくていいのかなあと思ってずっといました。
それで、平成２５年あたり、やめる２年くらい前に、コンサルの社長さんから、『民間は技術士を取らせたいけれども忙しくて取る時間もないんだよ』と。
私はその頃、その社長さんと色々やり取りをしていたので、『會田さんは取れるんじゃないの』と誘いがあったんです。県のＯＢの人やコンサルに再就職した人からも、『あると良いんじゃないの』と勧めがあって。
そんなに勧めてもらえるのだったら取った方が良いのかな、という感じがだんだんしてきて、『取れる

人が何で取らない』と言われると、チャレンジしなくちゃいけないのかなと。なにか、義務感というのでもないですけれども、取りたくても取れない人がいるのだから取れるような環境とか経験があるのだったら取るべきなのかな、とだんだん変わってきて、それでチャレンジしました。一番のきっかけはそれで、その勧めがなかったら取らなかった。
（秋山氏）
先ほど、『コンサルさんと良く議論をして仕事を進めなければダメだ』というお話があったので、議論するうえでも、やっぱりお互いが技術士を持った上で議論を交わすというのが大切な部分なのかなとは思うんですよね。ただ、一方的に思っていてもね(笑)。
（會田氏）
ひとつは、技術士ということが、その人の努力とか技術力の積み重ねを表しているステータスであれば、一つの物差しとして対外的に分かるという意味では、意味があるのでしょうね。色々なことを表しているわけですよね。
（秋山氏）
そうですね。
（會田氏）
例えば、技術士の建設部門の道路の資格を持っているとなると、そういう実力があると。そういう意味では良いのでしょうね。
（秋山氏）
お二人とも一発で受かっていますよね。
（會田氏）
１回です。
（秋山氏）
今日、二人のお話と資料を見ていて、公務員、県職員の方々は物をまとめるのが仕事みたいなところがあって、普段の仕事が技術士の文章の書き方に直結しているようなイメージを受けました。正直、私も１回では受かっていないので（笑）。なかなか、十分な勉強もできないとそう簡単に受からないですから、お話を聞いていて、普段からそういうことをやっているからなのだなと判明いたしました。
それから、昔、平成１０年くらいじゃないかと思いますが、県職員が技術士資格を取っても事務所登録を認めてくれなかったみたいですね。それが、前の土生会長の頃に一生懸命がんばって、県職員でも技術士事務所が登録できるようにやってくれたと思います。それが、平成１０年くらいじゃないですか、もうちょっと前かな。
その頃は、技術士資格を取っても登録できないし、ということで、県職員で向かう人は少なかったです。登録できるようになってから、ポツポツどんどん増えてきたというイメージですね。いざ、県職員が受けだすと受かるもんね、どんどんね（笑）。我々コンサルタントにはすごく苦しいですけれど（笑）。
（吉田氏）
登録というのは・・・、部長に？所属長に？
（會田氏）
所属長でも部長でもいい。現場のトップであれば。
（吉田氏）
所属長が技術士でないと登録できない、というわけではないですよね。
（秋山氏）
技術士の試験を通ると、技術事務所に登録しないと技術士を名乗れないじゃないですか。
（會田氏）
そうですね。所属長の証明をもらうと、県庁に登録になる。
今の県職員の技術士の話を言うと、あとで話題に出てくるかもしれませんけれども、平成２８年に『県庁技術会』というのを立ち上げました。その頃、『技術士資格を取って技術力を上げましょう』という元気な人が県庁にいて、その人と一緒に立ち上げました。仲間を集めて、技術士と技術士補の人、技術士になりたい人を呼んで、７０人くらいで立ち上げて。毎年、３人とか、多い時で５人くらいずつ増えているので、内３０人くらいが技術士になっています。何が良かったかというと、『あの人が合格するんだったら、自分も取れるんじゃないか』と（笑）、ハードルが下がってきた。『あの人は取った』とか、『あの人は今勉強している』とかいうと、『じゃあ自分も…』ということで、少し身近に感じられるというのが大きい。
仲間内で、受検の申請書の添削とか、口頭試験の模擬試験とかをして、そうやって１人でも仲間を増やそうと活動しています。県庁の中では、土木がメインですけれども、農林の方もいらっしゃいます。そうやって、『みんなでがんばろう』という雰囲気が上がっているのが良いのかなと思います。
（秋山氏）
それをお伺いして、だから受かるのだろうなと思いますけれどもね（笑）。

（會田氏）
酒飲みもしますね。年１回酒飲みをしたり、技術士試験対策の講師の先生に来てもらって、講演会を開いて、一緒に酒飲みをして盛り上がったりとか。そういう繋がりも勉強する励みになるのかな。
（秋山氏）
例えば、鶴岡に鶴岡技術士会というのがありますけれども、同じような名称で。これを読んで私が一番思ったのは、そこはあくまでも技術士か技術士補の会なんですよ。そこには、技術士を目指している人はいないわけです。だから増えないんですよ（笑）。
あとは、企業任せです。企業は、建設系で言えば建設コンサルタントの会社は、みんな技術士を目指しているので、そんな会がなくても良いのだけど。ただ、企業によって教育の仕方に差が出てきて、合否の人数差が出てきますけれども。
例えば、任意の技術士会みたいのが、例えば鶴岡技術士会みたいのがあったとすれば、そこには目指す人も入ってきてもらって、そうすれば技術士の考え方とか意見交換とか交流もできるので、技術士を受けるモチベーションというのも上がってくるじゃないですか。やっぱりモチベーションって、すごく大切ですよね。技術士ってね。
（會田氏）
そうですね。
（秋山氏）
だから、そういう意味で、県の会というのは非常に良いなと思いますね。ただ、安直に、鶴岡市技術士会に目指す人も入れましょうと、そう安直にはいかないですけどね。
（會田氏）
うーん。
（秋山氏）
やっぱり技術士の人の集まりは、それはそれで必要なものですから。
（會田氏）
うん、うん、そうですね。
（秋山氏）
ありがとうございました。
ここらで、ちょっと気分を楽にしていきたいと思いますが、御趣味ですね。技術士とは言え人間ですので、技術のことばかり言っていてもダメになっちゃいますね（笑）。御趣味が何かしらあるのではないかということで聞きたいですけど、吉田さん、いかがでしょうか？
（吉田氏）
なかなか恥ずかしくて、あれですけれども（笑）、ゴルフとか将棋とかですね、たしなむ程度で。体を動かすと言えば、町内会のソフトボール大会、最近はやっていないですけれども、そういうので監督をしました。監督といっても、人がいなくてやっているだけで。下手の横好きでそういう体を動かすのは好きです。
あとは、コロナで最近は行けませんが、家内と JR の大人の休日倶楽部パスを使って、東京界隈で伊豆・下田に行ってみたりとか、房総に周ってみたりとか、下町をずっと歩いて食べ歩きしたりですとか。これも、学生の頃のそういった経験を利用して。でも、東京って便利ですね、まち歩きするにしても、色々近くて。そういうのは面白いと思いますね。ちょっと体力がなくなってきたので、山登りはずっと前に好きだったけれどできないし、なんとか健康維持のために体を動かすこと。
あと、今のラインとか SNS とかすごいですよね。東京に住んでいても見られるので、孫をそこにいるみたいな感じでテレビに大写しできる（笑）。それぐらいです。
（秋山氏）
５歳と３歳ですか。３歳なんか、かわいい盛りですもんね。
（會田氏）
３歳は（笑）。
（秋山氏）
うらやましいです。では、會田さんの御趣味をお聞かせください。
（會田氏）
今回の質問で、一番答えるのが難しかったのが、趣味は何ですかという質問で（笑）。普通、アンケートだと、読書とか映画鑑賞とか書くんだけど、突き詰めて、どんなものに興味があるのと聞かれると答えられなくて。すごく考えて（笑）。
（秋山氏）
考えた趣味ですか？（笑）
（吉田氏）
考えて（笑）。
（會田氏）
じゃあ最近、なにが長続きしているのかなと色々考えると、やっぱり庭いじりで、花を植えたり、プラ

ンターで小さい花壇を造ったり、普通の朝顔とかヒマワリとかの花を毎年植えて、種を取って、次の年植えて・・・というのが一番長続きしているのかなって思っていて。やっぱり、色々考え事とか家で資料を作ったりするときに、息詰まると一回外に出て雑草を取ったり手入れをしていると、結構気分転換になったり、それでヒントが生まれたり。だんだん年を取ってくると、庭仕事とか、農作業とかがしたいというのは、みんな共通なのかなと思って、そういうのを今一番やっているのかなと思っていました。ここに写真を付けたのを、今日大写しで持ってきました。（写真を見ながら）一番面白いのが、これ、オキナワスズメウリという小さいしましま模様が付く実がなるんですね、晩秋、秋の終わり頃に。これ、そのまま置いておくと、緑が赤くなるんですね。それで、丸くして年末のクリスマスの時のリースを造って。

最近、そんなことをやって楽しんでいます。

（秋山氏）

このクリスマスリースいいなと思ってね。

私、去年１１月末に退職して、１２月にクリスマスがあるじゃないですか。こういうのを造りたいなとちょうど思ったところですよ（笑）。色々ありますよね。

（會田氏）

今、ありますね。土台も売っていますし。

（秋山氏）

造っているんだと思って、良いなと思いました。

（吉田氏）

今度４月にあれでしょ。

（秋山氏）

カフェですか？４月オープンの。

（吉田氏）

どういう風な感じで？逆に聞きますけれど（笑）。

（秋山氏）

退職するときにね、まだ現役の後藤さんがいるから言いづらいですけれども、散々工期に追われる仕事をしてきているじゃないですか。たから、納期なり工期がある仕事はもう十分したなと思って、そういうところから離れようと思って考えたときに、じゃあ何をしようかなと思ったんですよね。

やっぱり、学生の頃なんですよ、戻るのは。学生の頃、遊び歩いているときに、ジャズが流れる店でコーヒーを飲んだり、ウイスキーを飲んだり。日中、授業にも出ないでコーヒーを飲んで友達と喫茶店でしゃべっていたりするじゃないですか。その頃から、老後は喫茶店を開くぞ！と思っていた（笑）。それも、仕事に追われているとずっと薄れていくものだけれども、いざ、仕事を辞めて何をしようかと思っているときに出てきて、始めようかなと決断しました。

悪いことに、うちの子供もちょっと働けなくていたこともあるので、子供を使いながら、家族経営でやろうかなと。借金はしないようにして、身の丈に合った資本でやることにして、もしも流行らなくても、自分一人そこで楽しんでいればいいや、と（笑）。コーヒーでも落として、楽しんでいればいいやというような覚悟でやろうかなと、今進めているところです。そこで稼ぎがないと、本当に年金しかないので、それこそ暮らせなくなったら、また始めるかもしれませんけど（笑）。

写真５．秋山氏

（吉田氏）

いいですね（しみじみ）。

（會田氏）

うん（しみじみ）。

（秋山氏）

本当に夢物語じゃないですけれど、それこそ流行って資金元がついてくれば、上手なバンドでも入れて夜も開けるように。今のところは、まだ夜はやらないですよ。家族経営なので、夜やると８時間で済まないので、８時間労働を前提にすると夜まではちょっとできないので。ランチタイムとティータイムに、まず動かしてみて、それで食えなかったら夜にシフトしていくとか、色々考えているんですけど。

それこそ、ちゃんと儲かって、少し上手なバンドを呼べるんだったら、バンドを呼んで入れるようなカ

フェにしたいですけれどもね。
（會田氏）
いいですね。
（吉田氏）
自らじゃないですか、自ら（笑）。
（秋山氏）
うん。学生のころから、２年生の後半、単位を取れなかったというのは、ちょっとバンドに明け暮れたせいなので（笑）。
（會田氏）
素晴らしいですね。
（吉田氏）
うらやましいです。
（秋山氏）
ここの事務所のすぐそこに、すごく素敵なカフェができましたよね。畑のレストランだか何だか。
（西尾氏）
あそこは、だいぶ前から。
（秋山氏）
だいぶ前からここに来ていない、平成１８年くらいから来てないから（笑）。素敵なカフェができているなと。
（吉田氏）
我々の年代くらいはカフェとか喫茶店とか、こう、昔の学生街のね。
（秋山氏）
なんか、みんな一時期憧れますよね。我々の時代ってね。
（一同）（笑）
（秋山氏）
カフェやるっていうと、結構みなさん興味を持ってくださって、いつ？いつ？とか言われるんですけれど、みんな内心では１回はカフェとか喫茶店を開きたいと思っているだろうな、みんな一緒だなと。それに踏み切るか、踏み切らないかだけでね。
（吉田氏）
そういうことをやりたいというのと、そういう時間を持ちたいんですね。なんかゆっくりして、コーヒーを飲みながら音楽を聴いたり、何もないけれどボーとしていたりとか、そういう欲求が６０年代後半くらいから出てくるんじゃないですか。
（秋山氏）
うん。出ます、出ます。
（吉田氏）
もう、あといいな、っていう感じだね。自分の現役って一体いつまでかな、とか考え始めて。
（秋山氏）
やっぱり納期に迫られてずっと仕事をしていると、余計感じるんですよね。そういうのに縛られないでいたいな、みたいな。
（會田氏）
学生時代に FM ラジオで音楽をエアチェック、録音するのが流行っていて、その頃だと録音したのもあるし、レコードも１曲、１枚聞く時間があったんですよね、時間的に、学生の頃って。今って、気忙しくて、落ち着いて１つの CD とか１曲聞いたことって、振り返るとないです。
（秋山氏）
ないですよね。
（吉田氏）
確かに。
（會田氏）
全曲聴くとかね。
（吉田氏）
前は、CD を借りてきてコピーするにも時間が必要だったし、そういう時間ってやっぱり大事ですね。
（秋山氏）
そうですよね。その反動じゃないかなって（笑）。夢物語を現実化しようとしているところです。どうなるかわかりませんけれども（笑）。
それでは、元に戻りまして、退職後の活動についてはお二人から資料をいただきましたので、それを拝読させていただきました。
次に、最近言いたいこととか、今までの人生を振り返って、今も絡んだような話になりましたけれども、最近言いたいこととか、感想とか、それをお聞かせください。では、吉田さん、お願いします。
（吉田氏）
自分が今までやってきたことと関連しますけれど、印象に残っている仕事とも関連して、とことん現状の中でどう考えるかということをしていかないと、なかなか次のステップにはいかないし、アイディアも、結局そうやって詰めていかないと出ないのかなあという気がします。最近の、今の人達がどうかっていうのは良く分からないですけれども、ちょっとそういう突っ込みが少ないっていう気がしています。技術士の論文を作るにしても、自分がそうやって入っていかないと結局はテーマにできないし、そうい

った意味では、特に公務員はしょっちゅう職場が変わっているので、その場その場で対応していかなければならない面はあるんですけれども、切り替えっていうか、そこの中に入って行って、その中で結果を残すとか、そこまで考える必要はないけれども、全力で入っていくことが大事かなと。ちょっと堅いイメージですけれども。今まで自分が色々なところに異動したときに、それを心掛けてきたつもりだし、そういった捉え方が薄くなってきているのかなというのが、感じですけれどもあります。大分離れているので、今の人がそうだとは言えないのだけれども、そういう感じがしたので、そこはがんばってもらいたいなと思いますね。
色んな、拙い今までの経歴の中で言うと、そうすると何か糸口が見つかってきた気がするので、そういうことが大事だと思いました。すみません。抽象的になってしまって。
（秋山氏）
ありがとうございます。今時の流行で言うと、『全集中せい！』ということですかね。
（一同）（笑）
（吉田氏）
若い人は、今の職場の関係を見ていても、少ない感じはしますね。
（會田氏）
うーん。
（吉田氏）
あと、これは言わなければいけないのかなあ。官と民って違うなって思います。民は厳しいですね。
発注者と受注者ってさっきありましたけれど、例えば、今、私民間会社に勤務していての感想です。建設産業のヒエラルキー構造っていうのがあって、選べる側が上に立つんですよ。要するに、発注者は受注者を選べる。『受注者』は材料、あるいは下請を選べる。そういうヒエラルキー構造にはなっているんですね。だから、底辺っていうと語弊はあるかもしれないけれども、一番下支えしている人は選んでもらわなければいけないから大変だし、民間がその裾野の広い部分を占めていることは間違いない。
ただ、発注者にしても、逆に考えると、上に住民・県民がいて議会があって、という逆パターンの構造になっていますけれどもね。ちょっと、今、イメージだけで言っているのですが、そういう風になっているということを分かっていかないと。
あと、もう一つ、『技術と経済って何か？』と、すごく思います。なぜ、思うかというと、例えば、今の職場は『共和コンクリート工業』、『工業』って付くんですね。建設業じゃないです。工業というのは、物を生産するというのは、経済とものすごく結びついているんです。土木だけでなく色々な技術を考えると、『経済原理と技術はどういう関係があるのかな？』というのが気になります。技術屋がお金儲けしてはいけないというのでは全然なくて、公明正大により良いものであれば、それは当然経済的に評価されても良いのだろうと。
今、モヤモヤした言い方をしたけれども、技術が公という純粋なものではなくて、公と民の間で、全体としての発展に貢献できるのであれば、大いに技術力を伸ばしていって、それが経済的なものに転嫁されていっても問題ないのかなという気がします。
公的なものと民的なものって、大きいテーマだなと、改めて公から民間に行くと思います。要するに、民間は利益と品質は大事だし環境も大事だとは言うけれども、どうしてもそっち（利益）に振り向きやすい。一方で技術を通して、社会に貢献できるのは素晴らしいことであり、経済的に潤っても良いのではないか。言いたいことがあやふやになってしまいましたけれども（笑）。公と民というのは難しいなというか、そう簡単に分かれていないものだなという感じがしています。
（秋山氏）
難しいテーマで。
私の考え方、今聞いたので『技術士と経済の話』をすれば、技術力がどんなにあっても、例えばコストが高くて、世の中に出回らないものであれば、あまり良い技術とも言えない。当然、民の方は儲けたいので儲けるために安くする。今ある技術では儲からないのであれば、コスト削減できるような新しい技術を開発すれば、それは、会社にとっては儲けになるし、世の中にも出回るし、という関係になれば一番良いのではないかなと思いますね。
『技術と経済』って、おっしゃる通り両輪だと思うんですよね。片方だけよくなっても、世の中にとって、公にとって良いものにはならないんじゃないかな。その辺の漠然としたイメージもおありなのかな。バランスですかね、やっぱり。・・・話すとわけ分からなくなりますね（笑）。
（一同）（笑）

（吉田氏）
技術は純粋に、理論を実践する手段だけではないというか。技術を通して、経済効果とか色々なものを持っていて十分良いし、それは問題ないのかなと。難しいのは、明確にお金儲けのための技術かと言えないし、言いたくないし。
（秋山氏）
そこも、すっぱり割り切れはしないですね。例えば、科学技術の基礎で、ノーベル賞が取れるような研究は経済との関係をどう考えるかというと、経済と切り離して考えないとダメなような気がするんですよね。
　ありがとうございました。では、會田さんの方から。
（會田氏）
　はい。人生を振り返るほど、そんなに一生懸命生きているわけではないですけれども（笑）、仕事の面で考えると、色々やっていると毎年のように解決すべき課題とか施策が出てきて、目標を決めて『やれ！』となって、大変だ、大変だと思うのだけど、年度末になると形が見えてきたり、あるいは２年くらいかけるとそれなりにまとまってきたり、振り返るとそんな繰り返しかなと思っています。それなりに進んできたのかなと思います。
なんでかなって言うと、やっぱり仕事って一人でするわけではなくて、チームなりみんなで分担してやって、それぞれの持ち味とか能力を発揮して成り立っていくのだけれど、それには、ある人がバタバタと足をバタつかせて、池で言うと波紋をどんどん広げていって岸にぶつかるくらい、こうバタバタとしていると、岸から反射してくるわけですよね。邪魔なものがあればそこでぶつかって。
自分で悩んで抱え込まないで騒いでいると、周りが巻き込まれて、影響されて、色々な反響とか手助けとかが出てくるのかなと思います。仕事をするときは、あまり深刻に考えないで動き回っていると、解決の方向に向かっていくのかな、というのが今まで仕事をしての実感なので、そういうことを心掛けて、特に若い人を含めてそういう行動や取組みをすると良いのかなと、今、思っています。
（秋山氏）
若い頃だと、仕事をしていると『分からない』というのが嫌で、一生懸命勉強して一人で頑張ったりする時期もありますけれど、どうしても限界があるんですね。『それではもう解決できないところ』に遭遇すると、結局はバタバタせざるを得なくなる。その時に、表現はバタバタと言いますけれども、やっぱり、困っていることを話すことによって解決策が生まれてくるというのはありますよね。それは、私も実感しています。
（會田氏）
　吉田さんも、現役時代に色々な課題や対外的なことがあっても、収まるところに収まった感じですよね・・・？（笑）
（吉田氏）
　やっぱり會田さんが言ったように、動いたからじゃないですか。一人ではできないですね。特に土木はチームでやらないとダメだし。
（會田氏）
　あと、矢面に立つ気構え、開き直りもないと。
（吉田氏）
　最後は開き直り（笑）。そうですね。
（會田氏）
　やるだけやったから、これ以上はできないというのもあり得ると思うんですよね。これ以上頑張れないときはある。
（秋山氏）
　でも、お二人の資料を見て正直に思ったのが、お二人とも、我々から見たらずっと優秀な学歴をお持ちだし、県職員という立場でハードルの高い仕事をこなしてきているんですけれども、その割に、今おっしゃったように自分一人ではできないという認識を早くからお持ちで、人にいかにお願いするか、動かすか、頼むか、というノウハウを早い段階からやっておられるので、その辺がやっぱりすごいなと思います。
我々なんかは、大した頭もないのに自分一人でやろうとするから抜擢するんだけれども。そういう意味では、確かにレベルの低い我々がレベルアップするには自分で頑張ったからこそ少しはレベルアップする。でも、今言ったように、課題を冷静に見つめて、いかに素早く解決する手法というのは、学ぶのは非常に遅かったと思っています。
そういう意味では、優秀な方々が最初から、それがやれるから優秀なのかもしれないですけれどね(笑)、その辺はすごく感銘してお二人の資料を読みました。
（會田氏）
　急にやれたのではなくて、係長や補佐、課長にな

るステップで、だんだん会得してきたので、最初からできるわけはないです（笑）。
（吉田氏）
　たまたま、巡り合わせで何が起こるかは分からないので、巡り合わせた時にどう動くか、しかなかったですね。深い考えはなかったけれど、明確に言えることは、その時点で自分の持っている、知っている人も含めて、それは使おうということは間違いなく思っていましたね。問題、課題があったときは。
　よく言われましたね。課題と問題って違うよって。問題というのは、例えば高齢化（人間誰しも歳をとる）というのが問題で、問題は解決できないけれど、その問題を何らかの手段で解決できる手法を編み出せるのが課題だということで、問題と課題は認識が違うよということは、企画振興課の時に言われました。自分で、なんらかの形で超えられることは課題、だから、空き家は課題だよね、おそらくは。だけど、高齢化は、課題ではなく問題ですね。どうしようもないものはどうしようもないのであって。そういう解決ができるように具体的なものをやっていくのが施策だよということを、昔、企画振興課に時に言われました。そういう認識でやっていかないと、なかなか。
（秋山氏）
　そうですね。ありがとうございます。
今のような話で、若い技術士に対しても、同じような話になると思いますので、最後に日本技術士会並びに山形県支部について、一言、アドバイスをいただければと思います。吉田さん、お願いします。
（吉田氏）
　おこがましくて、アドバイスなんて（笑）。
　集団、みんなの力ってすごいんですね。個人でいくら頑張ってもできないことっていっぱいあって、そういう意味で、しっかりした県支部があればこそ色々な活動ができるし、バックアップしていけるので、これまでと同じように我々を支えてもらえるとありがたいです。
（秋山氏）
　どうですか、事務局（笑）？
（小山田氏）
　ありがたいお言葉です（笑）。
（西尾氏）
我々に対する叱咤激励と受け止めます（笑）。
（秋山氏）
　會田さん、お願います。
（會田氏）
　私からは、『お願いごと』というベースですけれど、CPD 継続研鑽の制度が変わって、WEB 研修で説明を受けました。義務化ではないけれど、活動実績を登録して公にしていきましょうという中で、２０時間とか５０時間というひとつの目安があったり、技術士でもランク分けをして新しい制度ができたりという話を聞きました。
　CPD は、取るのが大変なんですよね。平均５０時間といったときに、なかなか積み重ねが難しくて。私は幸いなことに会社を通じて色々な協会・団体の研修の情報が来ますけれど、それでも開催時間が日中で、例えば１０時とか１時とか、稀に夕方とかもありますが、みなさん、時間の設定は苦労されているのかなと思いました。中には、リアルタイムではなくて録画方式で、オンデマンド方式で休みの日に家で見られるというのをやってくれるところもありますが、数が少ないので。
技術士会に限らず、色々な協会・団体さんに録画方式での開催を考えて欲しいというのと、理想を言えば、近々どんな協会でこんな講演会があって CPD の研修に該当します、というのが、一覧表みたいのがあれば非常に楽なのかなと最近思ってきました。それは、なかなか取り組むのは大変でしょうけれど、もうちょっと CPD の活動の実態というのを技術士会の方でこまめに取り組んでいただきたいなというのが、ここ４月からやってきて感じますね。なかなか、意識的に取らないと大変ですね。
（秋山氏）
　仕事をしていても時間帯が合わなかったり、日にちの都合がつかなかったりというのが当然あって、結構案内は来るけれどもなかなか受けられないというのが実態ですし、今は WEB があるから大分参加しやすくなったけど、前はもっとひどくて、会場に行かなければならない時は本当に大変でしたね。
そういう意味では、今は WEB も使えるようになって、WEB の活用でこんな風にできるのだなというのか分かってきたので、CPD は取り易くはなってきたと思いますね。人それぞれで参加できる時間が違うので、同じものを、舞台じゃないけど、一日２回やるとか、日にちを変えて時間帯を変えるとか、ということをやってもらえると非常にありがたいなと思いますね。

最近、みなさん仕事が忙しいから、５時半くらいから１時間くらいの WEB の案内とかも結構あるんですよね。
（會田氏）
来ていますね。
（秋山氏）
会社にいる頃は非常に良いなと思いましたけれど、家にいるとその時間帯が夕食の時間で、逆に受けられなかったりするんですよ（笑）。
あと、土曜日も最近多くなりましたね。仕事をしていると、土曜日は休みたいですよね。わがままでね（笑）。そこを乗り越えて、本当に CPD のために勉強するんだ！という意気込みがないとなかなか継続できなくて、大変ですよね。
（會田氏）
大変だと思いますね。
（秋山氏）
５０時間といえば、単純に計算すると１カ月５時間やればいいんだと思うのだけれど、それがなかなかできないのですよね。
（會田氏）
難しいですね。
（秋山氏）
全くできない月も出てきますからね。この辺は、技術士会も役員会の中で検討願います。
（小山田氏）
CPD に関して、例えば、土木学会誌に寄稿すると１０時間、県コン協の委員会があると１０時間、これで２０時間は取れる。技術士会の CPD で言うと。あとは、講演会とか、優秀な人達は講師になると、論文を書いても取れる。会社でも発表会があると、それも CPD が取れる。工夫すれば、自分のところの活動でもある程度確保できる。
（會田氏）
うん。
（秋山氏）
上限時間がありますけれどね。
（會田氏）
それぞれの活動で。
（秋山氏）
社内教育とかだとね。
（小山田氏）
最初、社内発表会というので申請したら、業務の一部ということで却下された。１年に１０パーセントくらいチェックされる。
（會田氏）
そうですね。抜き打ちで。
（小山田氏）
それではダメだというので、『技術開発研究会』と名前を変えて登録して、やることは同じだけど（笑）。
（秋山氏）
そうなんだ。
（西尾氏）
『研究発表会』という名称だと通る。
（小山田氏）
外部だけでなく、社内で工夫すれば、黙って５，６時間は取れる。技術士 CPD って講演会を聴いただけではダメで、３種類以上ないと。
（秋山氏）
そうそう、バランス良くないとダメですよね。
（小山田氏）
なにかしら探さないとダメですね。
（會田氏）
そうですね。
（秋山氏）
協会とか、学会とかにいて、講師をたまにやる人であればバランスが取れるからいいですけど、そういう環境にない人だっているじゃないですか。だから大変なんですよね。
（會田氏）
今、小山田さんがおっしゃったような、こういうケース、こういうやり方があるということを、もうちょっと情報提供してもらうと他の人も取り易くなる。
（小山田氏）
技術士会に入ると、情報が入るという（笑）。
（秋山氏）
CPD が足りない人は今年入れって（笑）。
（會田氏）
足りない人は技術士会に（笑）。
（西尾氏）
プラットフォーム的なものを考えてみたのですけれど、情報が入ってくる時期もバラバラだし、なかなか難しいと思いますね。その都度流すくらいのことしかできないんじゃないかな。
（會田氏）
会社だと、建設コンサルタント協会とか補償コン

サルタント協会とか、色々入っているので、そこからどんどん来るんですね。だから色々選べるんですけど、そうじゃない会社とか県職員とかだと研修の情報が限られてくるんですよね。
（小山田氏）
本部でも、色々な部会があって研修会をやっていますけどね。そういうところは、本部の会員になっていないと情報が来ない。
（西尾氏）
来るやつは、日本技術士会の会員になっているのが前提で来るから。
（小山田氏）
基本前提になっているけど、おそらく乗り込める。
（西尾氏）
乗り込めれば良いけど。
（會田氏）
会員になっていれば来るけど、会員になっていないと・・・。
（小山田氏）
CPD が重要視されれば、高い会費で入るメリットがあるかもしれないですね。
（西尾氏）
それが作戦なのかもしれない。
（會田氏）
ああ、会員を増やす・・・。
（秋山氏）
まあ、今の御意見を踏まえて、技術士会の方でもCPD を増やすためのスキームというか、アドバイスみたいなものを発信した方が良いかもしれませんね。役員会でまとめるとか、担当の技術委員会の方で案を練ってもらうとか。案を練るほどでもありませんね。『こういうやり方があるよ』と紹介をしてもらえるような活動をするように、今日の御意見をいただいて。
（小山田氏）
建コン４団体にバックアップしてもらって、情報があったら、会社にだけでなく、技術士会にも流すようにして。
（會田氏）
そうですね。技術士会に。
（小山田氏）
窓口の方に。
（西尾氏）
吉田さんの方にはいかないですよね。
（吉田氏）
私のところは、おそらく直接的には関係がないですよね。必要としているのかな・・・？会社の本社の方だとそれなりにあるだろうけど、支店だとそれほどは。コンサル系と違うところですね。
ただ、日本技術士会から案内が来ている研修を全部受けていたら大変だよね。私は、山形県支部から来るような研修はできるだけ受けるようにしていますけれども、今の職種から言うと、あまり直接は関係がないので。
県職員だと、そういうのは全然違う部分が出てきますよね。CPD 云々とは関係があるのかな？
（會田氏）
技術士である以上、県職員でも民間でも関係がないから、CPD に関しては同じ。だと、逆に不利になるんですよね。
（吉田氏）
そうですね。そこをどうするかですよね。直接それを必要としないところでも取れるような仕組みということですかね。
（秋山氏）
特に県職員は、例えば『WEB で１時くらいにこういう講習会があります』と言っても、そう簡単に受けられないですよね。
（會田氏）
そうですね。勤務時間中に受けられない。
（秋山氏）
我々だと、関係する仕事の中で受けられるけど。
（吉田氏）
堂々と受けられるのは、コンサル系ですよね。建設の方もなかなか難しいです。工場系とか、公務員も。
（秋山氏）
その辺は少し考えないとダメかもしれませんね。
（西尾氏）
今回、１回目のインタビューをやってみて、こういう話が出たよというのは、役員会で小山田さんから役員に対してそういった話をしていただくという形で、役員全体でそれを受け止めるという流れにしたいと思うのですけれども。
（秋山氏）
どうもありがとうございました。
特に、CPD に関しては貴重な意見をいただいていますので、支部の方でもなにか考えるなりしてい

ただくということで、私も一応役員としていきますので。

（西尾氏）

広報委員会としては、そういった意見を拾い上げたよと役員会に挙げていただくと、役員会の中で、その問題の担当はどこにするかとかという話になりますから。

（秋山氏）

そういう風に取り組んでいきたいとおもいます。

今日は、長々と長時間に渡ってしまいましたけれども、まだしゃべり足りないところがありそうですが、本当に今日は忙しいところありがとうございました。しかも、天気の悪いところ、ありがとうございました。

お二方の経験なり、技術士会に対する御意見なり、若者へのアドバイスや意見など、非常に参考になりましたので、これは形にして、まずはホームページのほうにあげるような方向で進めさせていただきます。今日はありがとうございました。

写真６．左から後藤氏、會田氏、吉田氏、秋山氏

略歴

會田　秀一（あいたしゅういち）

上山市出身、上山小学校、上山南中、山形東高等学校

昭和 54 年　東北大学　理学部物理学科卒業

昭和 54 年　山形県庁入庁

主な役職

下水道課長、河川課長、置賜総合支庁建設部長、村山総合支庁建設部長、整備推進監（兼）次長

平成 29 年３月　山形県庁　定年退職

平成 29 年４月　公益財団法人　山形県建設技術センター（常務理事）

令和３年　株式会社　双葉建設コンサルタント（山形支店長）

吉田　郁夫（よしだいくお）

天童市山口出身、山口小学校、天童二中

山形県立東高等学校

昭和５２年、東北大学工学部土木工学科

昭和５２年、山形県庁入庁

主な役職

道路課長、都市計画課長、庄内総合支庁建設部長、整備推進監（兼）次長

平成２７年３月　山形県庁　定年退職

平成 ２７年４月　公益財団法人　山形県建設技術センター（常務理事）

平成２９年　共和コンクリート工業株式会社　（理事、令和４年から顧問）